

新刊
紹介

Books are the quietest and most constant of friends; they are the most accessible and wisest of counsellors, and the most patient of teachers.

Isamu Saito, *A Study of Piers the Plowman, with special reference to the Pardon Scene of the Vision*
東京・南雲堂、A5判二六二頁、定価
一一〇〇円。

文学部教授斎藤勇氏の近著である。イギリス十四世紀の難解な宗教詩『農夫ピヤスの幻想』に関する研究であるが、副題にその第七の書の赦免状破棄の場を中心とする旨があるように、主人公農夫ピヤスが彼に与えられた赦免状の文言の解釈をめぐって司祭と口論するシーンの研究で、全篇の意

味解説の重要な手がかりとなるところである。著者はその文言を「よき行い」(Dowel)へのすすめと解釈し、従来行われてきた「よき行い」の棄却、「よりよき行い」(Dobet)へのすすめであるとする説を駁している。すなわちこの際ピヤスの言及する三つの聖書引用の中世的解釈を検討することによって自説を結論している。これは著者のもっとも苦心を払ったところで、聖書釈義学の援用である。本邦では初のころのみであり、その手順もてがたく手落がない。

完全なハイアラキーによって構成される中世共同体における個人の職域に応じた「よき行い」の生活がどのようなかたちで救済につながっていったか、そしてそのハイアラキーが崩壊せんとする矢先の中世末期に、よい意味においても悪い意味においても必死に中世的秩序の回復を絶叫したこの詩人の存在意義が浮き彫りにされている。この労作はそのまま著者の中世的世界の解釈といわねばならない。

この著は実に本邦における最初の『農夫ピヤスの幻想』研究である。重要視されながら敬遠されてきたこの作品をここまで根

気強く、詳細に研究されたことに心から敬意を表したい。学界への寄与は地味ではあるが、また、まことに大であるといわねばならない。

英文で書かれていることにも著者の野心的な、世界の学界への挑戦がよみとれる。英文また明快で、もって範とするべきものであろう。(N・U)

「人文科学」1 同志社大学人文科学研究所編刊、A5判二〇五頁、定価三〇〇円。

この「比較文学研究」特集号には、人文科学研究所の助成金による二つの共同研究、すなわち「東洋の西洋における老子の理解」(代表者、吉田恵)と「『同志社文学』」(代表者、岡本昌夫)との研究成果の一部が収められている。その他に兎玉実用氏の「D・G・ロッセティと蒲原有明」、飯倉亀太郎氏の「夏目漱石のデフォー論」、松村昌厦氏の「明治時代におけるディケンズ紹介の諸相」といった比較文学研究の論考がある。

明治二十年三月から二十八年四月まで八十七号つづいた第一期「同志社文学」は、当時「早稲田文学」(明治二十四年創刊)

よりも三年早く、さらに赤門の「帝國文學」(明治二十八年創刊)よりも八年も早く創刊されたが、従来同志社の学内で閑却されていた。このたびの岡本昌夫氏の『同志社文學』と新体詩」は、その方面の研究の一つとして注目すべきものである。同志社の初期は創作方面の文芸は不毛であったが、岡本教授の論文は近代詩史においてその名を逸することのできない湯浅半月、磯貝雲峰をはじめとして、「同志社文學」誌上にあらわれた新体詩作者の作品や西洋詩の翻訳を紹介して、それらの創作詩や訳詩の中にも彼らの特色を示すものがあることを論証している。さらに新体詩論の紹介では触れていないが、「同志社文學」第五十二号(明治二十五年三月)の記事に見えている湯浅吉郎(半月)の「新体詩論」は演説の要旨とはいえ、半月の新体詩論の資料としては一読に価するものであろう。また岡本・衣笠両氏の半月の「十二の石塚」の研究は、この詩が旧約文學に拠るところの優雅のうち一種の荘重さをもつ叙事詩であることを詳しく解説して、ただに個人詩集の最初のもの、あるいは書誌学的な価値

だけにとどまらないことを論じている。

全体からみると、「同志社文學」は文學雜誌といっても、いまの文學雜誌とはよほど違った内容のものであり、文章として表現できるものはみな文學と称していた文學觀にたっていて、むしろ総合雜誌の感がある。その文章は純文學の枠だけには止らないで、哲学・宗教・政治・経済・科学といった多方面にわたっている。従つて本号では共同研究のうちの一部しか発表されていないことは遺憾である。それらは将来の報告に期待したいと思う。

(重)

住谷悦治ほか編『講座・日本社会思想史』

第一巻・明治社会思想の形成、東京芳賀書店、B5判三八〇頁、定価四八〇円。

いままでいわゆる思想史とよばれる著作や論述は数限りなくうみだされてきた。なかでも思想史ブームとよばれる六〇年代以降においては一方では錯綜し、より複雑化した現代の体制打開の座標軸を求めて、またもう一方では明治開府百年をまぢかにして日本の近代化のあしどりをふりかえり、

われわれにとって日本の近代社会とはいったい何であつたのか、何をもたらしたのか、

か、ということを開いかえず試みとしてさまざまな思想や日本の近代思想家の評伝がかかれてきた。だがその多くはしばしば思想の流れの概説にとどまったり、あるいは個々の思想家のすぐれた著作の紹介にとどまり、全体としての社会思想の形成が時代の歩みとのかかわりあいのおうえでどのようにな成し、発展し、そして消していったのか、という点では物足りなさを残していたことも明らかなことであつた。

本書は思想史ものの類害がもつているかかる弱点に着目し、日本の近代史にときどきの社会思想が果たした役割を体系的に論じつつ、個々の思想家や思想相互の対立をできるだけ新しい研究にもとづいて掘り下げようとした試みであつて、その意味では思想史ブームの中でもユニークな角度からはりさげた講座であるということができるとあろう。

第一巻『明治社会思想の形成』は総論にひきつづき、第一章イギリス自由思想の流入——福沢諭吉と田口卯吉——(森田康夫)第二章フランス民権思想の展開——中江兆民から大井憲太郎まで(山口光朝)、第三章

日本社会政策学派の形成——金井延と桑田熊蔵(住谷悦治(総長)、第四章キリスト教社会思想——内村鑑三と木下尚江(北崎豊二(校友)、第五章明治社会主義の成立——幸徳秋水と片山潜(辻野功(校友)から成り、初期の開明思潮の伝来にはじまり、明治後半の社会問題の発生とのかわりあい)のなかで形成された日本の初期社会主義にいたるまで、いちおう明治期における主要な思想のライト・モチーフとその中におけるすぐれた思想家たちの考え方、激動する現実に対する対応の姿勢をつうじて「思想」の果す社会的役割をあきらかにしようとしている。とくにいままで一部の研究者以外には知られることの少なかった金井延・桑田熊蔵らの社会政策学派の人々の事跡が学問上のそれにとどまらず、社会的なかわりあいをふくめてたんねんに紹介されていることは本巻のもつ意義をさらに高からしめているといえるだろう。

第二巻以降についても紹介されている目次からみると大正期の日本ブルジョワジーの主流を代表するイデオログである交詢社系の人々や商工会議所、新聞雑誌記者の発言、とくに長谷川如是閑や鳥居素川などの考え方、さらに戦争下の生産力論や高見順・中野重治らの文学者たちの転向と自立の問題など興味ぶかい素材がとりあげられようとしている。惜しむらくはこれほど市広く題材を求めながら明治期においては高山樗牛、井上哲次郎らの「日本主義」の人々、三宅雪嶺、杉浦重剛、志賀重昂らの国粹の人々、のちには北一輝や頭山滿らの思想や動きなど、いわゆる右翼系の人々が全く登場しないことである。また、生産力論との関係で中日戦争下に近衛「新体制」のブレイン・トラストともなった昭和研究会の人々やその動きなどもこのような講座の対象の一端としてとりあげたならば反動体制下の抵抗問題にも新しい脚光をあげせることになるかもしれない。いずれにせよわれわれがうまれ、育ってきた日本の近代社会の全体像と、その中でいきまづいてるさまざまな思想をトータルなものとして把握し、現代を生きぬく座標軸をみつげだす土壌を発掘するものとして、このような体系的な講座が刊行される意義があるとみるべきであろう。

(仲尾)

前芝茂人(校友)著「山へのおこがれ・アンデス探検記」東京・理論社、菊井二〇八頁、定価六〇〇円

同志社山岳会は同志社創立九十周年記念行事の一環として一九六五年三月十一日まで江上康氏を隊長としてペルーアンデス・アマゾン学術調査隊を派遣した。調査隊は隊員九名、カメラマン一名で編成され著者の前芝氏は副隊長として参加した。本書は著者もあとがきで書いてるように著者の個人的記録である。一般の登山記は多くの場合登山の専門用語が多く、なじみのない読者には読みにくいのが、本書は少年少女を対象として豊富な写真と平易な文章で書かれている。

本書の前半はこの調査隊の目的であるペルーアンデスの高峰サルカントイ(六三〇〇メートル)の頂上に至るまでの道を、キャラバン編成の苦心、隊員たちの心の動き、氷や雪にとざされた岩壁にいとむ姿を気負わずたんだんとスケッチ風に見える。後半は隊員の半数はアマゾン下りを、半数はメリソス(五四一〇メートル)の登山と分かれ、著者はメリソス登山に参

加した。メリソスは高度こそサルカンタイに及ばないが、アンデス中の未踏峰として残されている険阻な山である。雪崩や悪天候に悩まされながらの初登頂を記している。

このように本書はサルカンタイとメリソスの登山記であるが、ただ単に登山記というだけでなく、インディオの生活やまたインカの遺跡、歴史についてもかなりのペーシ数をさいている。

また著者は少女少女たちに何故山に登るか、山に登るための注意、心構え等にふれ大人達に対しては山は決して危険なものではなく、少女少女たちにもっと理解をもちその冒険心をのばしてやるべきだと主張している。少年少女の夢をひろげるための好著の一つであろう。(加藤)

今中寛司(文学部教授)著「徂徠学の基礎的研究」東京・吉川弘文館、A5判、五六五頁、二、八〇〇円。

明治期の山路愛山にはじまり、戦後の丸山真男氏の業績に至るまでいくつかの徂徠研究は積み重ねられてはきたが、いまだ二辨をはじめ、徂徠の全著作の考証研究は未

完のまま放置され、全集さえ刊行されていない現状である。著者はそのことの徂徠研究にもたらず重大な欠陥を痛感し、ここに获生徂徠の業績をその全著作にわたって、東洋史的視野にたちつつ、体系的また個別的な研究を公けにされた。徂徠研究史上、近世儒学思想の研究史上まことに一時期を劃する労作である。

本書は、序章・徂徠学研究史と問題の所在／第二章・徂徠学の形成過程／第三章徂徠学の成立／第三章徂徠学の思想的評価、からなり、第一章及び第二章において「訳文箋語」「養園隨筆」以下ひとつひとつの著作とその思想について、つねに中国儒学との関連から精細な検討が行なわれている。著作が本書を「基礎的研究」と名づけられた所以が、これら徂徠の全著作の考証研究にあることはいうまでもないが、しかし本書はけっしてそのみに終るものではない。さらにその上に立って中国儒教との関連における徂徠学の獨創性と思想史的意義を鋭く追究され、独自の見解を呈示されている。それにもかかわらずなお「基礎的研究」といわれた所以は、その徂徠学の獨

創性と思想史的意義の評価を導き出して、研究上の基本的姿勢をも含んでのことかとおもわれる。その第一は徂徠学研究の基礎は、徂徠自身が漢文をシナ語として(ギリシャ語やラテン語と同じ意味の外国語として)扱っている以上、徂徠学の儒教用語や哲学を日中儒学史の上から正しく概念規定して扱えなければならないということ、第二は歴史学としての思想史は、哲学の理論に立つ哲学史とはちがって、一つの思想の思想概造よりは、歴史上に果した史的役割を何よりも重視しなければならぬという主張等である。その結果、第二の観点からは、徂徠の儒教的政治哲学の側面よりも、古文辞学という文詩の方面かつその養園社なる文詩サロンにおいてこそ大きな史的役割を果たしたことが説かれ、中国儒学との関連からは徂徠の「氣質不変化説」こそ独自のものとして徂徠学の中心におかれるべきことが説かれている。

この老大な労作を一言にして紹介することは至難である。その一端にふれて本書の紹介にかえたい。

(笠井)